

本発表はヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819）と、彼によって触発されたヘーゲルの思惟から、「直接性」と「媒介」の対概念を取り出して考察する。これらの概念は宗教的な経験の可能性が問われる際、その基盤となる思考枠組みを形成するものであると言ってよい。それは、これらの概念が哲学史上において最も明確に主題化されたとき、すなわちヤコービがスピノザ的な論証知の「媒介」を否定し、「直接的な（無媒介的な）」感受に絶対者経験の座を求めたとき、そこで問題とされていたのは、「直観」と「概念」の認識論的対立ではなく、神的なものをめぐる「信仰」と「知」の対立であったことから明らかである。

問題の奥行を把握するためには、ヘーゲルによるヤコービ批判を確認しなければならない。ヘーゲルはヤコービによる信仰の「直接性」の「発見」を高く評価する一方で、ヤコービがその概念を「媒介」と排他的に対立させたことについて厳しく批判する。その批判においてヘーゲルは自らの構想する「媒介された直接性」の理念を提示し、知の境位における両概念の弁証法的統一を説く。

とはいえ本発表がここでヘーゲルの批判を参照するのは、ヘーゲル的な理念を礼賛するためではない。むしろ両者の距離をより厳密に測定することによって、ヘーゲルの提示する「媒介を排除する直接性」と「媒介と調和する直接性」という図式的整理を超えたいのである。発表者の見るところによれば、ヤコービの思想はたしかに知的媒介に対して否定的であったとしても、けっして媒介一般を排除するものではない。媒介一般を知に回収し、「媒介」と「直接性」を知の問題として鑄直したのはヘーゲルであった。ヘーゲルがそのうえで知的媒介において知を超出する非知的な契機を求めたのに対し、ヤコービは知を根拠づける非知的な媒介の可能性を探求したと言える。こうして「媒介」と「直接性」をめぐる両者の取り組みは、問題の歴史的な起源にありながら、宗教哲学的思惟が持ち得る、可能的な方向のオルタナティブを形成している。それを示すのが本発表の課題である。

本発表は、レヴィナスの「メシア的テキスト」に着目し、理性的努力と無条件の恩寵との両立不可能性のパラドックスを通して、知の信をめぐる二つの運動を明らかにする。レヴィナスにおいては、一方で、宗教が理性の成熟とされるのに対し、まさに宗教をあらゆる神秘化から隔離する必要性から、他方で、宗教は主体性のあらゆる可能な知の彼方に位置づけられる。発表者は、これを知の二重化と捉えるのではなく、知の二つの運動と捉える。というのも、知を境界確定によって細分化し、それぞれの知に活動領域を与えることそれ自身に対し、レヴィナスは異議を唱えているからである。

カントの宗教論で記述されるアンティノミーにおいては、根元悪の超越と内在の不可解な両立性を分析することによって、信と知の調停が企図される。こうした調停法は、人間理性に二つの境界線、理論的／実践的領域のそれを引くことによってなされる。このとき、「確実性」として把握されうる努力はその理論的領域に属するが、恩寵の理念はこの領域を超越し、実践的領域において「希望」の形式のもとに描かれる。実践的領域から理論的領域を除外した領域において、両領域の水平的重ね合わせにおいて、努力と恩寵の調停が可能なのである。

しかしながら、この二境界画定は、理性の領域所有それ自体を問いには付さない。対して、レヴィナスが描く知の二つの自己批判の区別（一方はその限界設定の批判、他方はその領域所有の批判）に従えば、彼はそもそも理性が領域を確保されていることを問うているのである。

「メシアである私」の概念により、この知の二つの自己批判の運動は、「普遍化」の二つのあり方に対応させられる。一方は、多様に異なる領域を水平的に重ね合わせることで調停を図る普遍化、他方は、主体性が自らの領域を奪うことによる普遍化の運動である。レヴィナスにおける信と知の調停は、後者の普遍化、自己の脱領域化を図る知の垂直な運動によってなされるのである。

「火は火を焼かない」（『宗教とは何か』三・四）について

— 西谷啓治における「自体」あるいは「自然」 —

美濃部仁（明治大学）

『宗教とは何か』において「火は火を焼かない」という言葉は、物のリアルなあり方を表現する言葉とされている。それはどういうことかを考えてみたい。

1) 「火は火を焼かない」は、火の、対象的ではないあり方を言い表す言葉であるということが、まず言えるであろう。対象としての火は、「焼く」ものであって、「焼かない」ものではない。しかし、そのように対象として見られた火は、我々の対象的なものの見方によって歪められ、火それ自体としてのあり方を失ってしまっている、すなわちリアルではない、と西谷は考える。そういう考えに基づいて、火のリアルなあり方はむしろ、「火は、焼かない」という、火の対象性を否定する言葉によって表現される、ということが言われていると理解することができる。

2) しかし、「焼かない」というのは、「焼く」火のリアルなあり方である。「火が火を焼かない」という言葉によって言われているのは、火が焼かないということではもちろんなく、火は「焼かない」ところから「焼く」ものであるということである。それでは、焼かないところから焼くとはどういうことであるのか。

第一に、火のあり方に注目するならば、焼かないところから焼くとは、火が他の「焼かない」ものから区別された「焼くもの」として実体的に存在するのではなく、他の一切のものとの相互関係において「焼くもの」になっているということである。西谷はそれを「回互的關係」という言葉を用いて説明している。発表では、この「回互的關係」を考察の一つの中心としたい。

第二に、自己のあり方に注目するならば、火が焼かないところから焼くものとなっているとは、自己が自己でないところから自己になっているということである。これは、西谷によって、空を「立場」とすることであるとされているが、発表では、このことについても考察したい。

第三に、回互的關係にある万物と自己との関係も、そこでは一つの問題となる。この問題は、「自然」とは何かという問題に結び付く。発表では、西谷において自然がどのように位置づけられているかにまで言及できればと思う。